

前号で、採炭のいじめがついでいるので、今最もその採炭について稿を進めたい。いつも大正十五年当時の諸資料を用いているので、本稿もそれに数があつたものと決めてかかれなくなつていいとする。まあ、切羽数からみてみると、四山鉱の切羽数は一ヵ月平均で二千五百八十九、そのうち半切羽が六百七十四であるが、いわゆる本切羽(二人ないし三人)である。ただ原則的には一人の採炭夫に二人ないし四人の運炭夫が一組となって採炭する切羽のことである。ただ原則的には一人の採炭夫に一人の運炭夫が一組になるのである。夫が一組となって採炭する切羽のこと(二組)は千五百十五カ所。一ヵ月ちなみに他の炭鉱、万田坑、宮

採炭と採炭夫

武 松 欣 男

四山鉱の歴史の中から

第七回

るが、坑木の使用量は一ヵ月、一千五百三十本である。これらのが組み合わされはじめたときから、四山鉱の坑内外総坑夫数から出炭平均トン数をみると、一人平均六百五十五キロだ。一トんにも満たない。

三池炭鉱の他の坑山(ヤマ)、

富原(一坑、二坑)、富浦(勝立、

万田、それに四山各坑、坑内外総

坑夫数一人当平均出炭トン数は、

一所二分の一である。それもその

所二分の一である。この切羽数

は延べ数だから、六十カ所も切羽

すで、大正十二年の開坑から三年

を経た程度の炭鉱であるから。

これが昭和五年になると、他の炭

鉱と肩を並べる切羽数をもつて

る一人平均一万トンの出炭量と比

べてみると、どういう感概が浮か

んでくるだらう。

かつての炭鉱夫は、口が重い。

かつての炭鉱夫は、口